

敦煌資料と初期チベット仏教研究

上 山 大 峻

一、敦煌出土のチベット文資料

敦煌莫高窟第十七窟経洞から発現した古写本の中には、チベット語、ウイグル語、ウテン語など漢文以外の言語のものが含まれるが、とりわけチベット語写本は漢文に次いで多数である。そのうち、A・スタイン氏が収集したものは、現在、イギリスのインド省図書館に保管されている。ド・ラ・ヴァレ・プサン教授によって作成され、一九六二年に出版された目録 *Catalogue of the Tibetan Manuscripts from Tun-huang in the India Office Library* では七六五点を数える。フランスのP・

ペリオ氏が取得してパリの国民図書館に蔵されているものは二二一六点で、一九三九年から一九六一年にかけて三冊に分けて、M・ラルー女史により目録 *Inventaire des manuscrits tibétains de Touen-houang conservés à la Bibliothèque Nationale* が発刊されている。ソ連のオルデンブルグ氏も採取しており、ソ連科学アカデミー・レニングラード支所に蔵されるものは、筆者の見せてもらったかぎり二二点で、その殆どは『無量寿宗要経』のチベット訳写本であった。最近、各国探検隊の蒐集から免れて中国の敦煌県文化館や蘭州図書館に保管するものが、黄文煥「河西吐蕃文書簡述」(『文物』一二号、一九

七八)で発表された。貝葉のもので約一万枚(ほとんど『十万頌般若』)、卷子形のもので三一九点(ほとんど『無量寿宗要経』)であるという。^(補註)

敦煌は八世紀初頭より勢力を増してきたチベットの侵攻をうけ、遂に七八六年頃、それに支配されるところとなり、八四八年、張議潮が起つて唐の支配を奪還するまで、吐蕃の領土となっていた。⁽¹⁾ この間、従来の漢人社会も継続していたが、チベット人が当然のことながら敦煌に移住し、チベット仏典の書写学習なども行われていた。チベット文写本が多数敦煌に遺っているのはこのような事情によるものである。写本の形は、貝葉形、折本形、卷子形、冊子形など様々であるが、すべて手で写した手抄本で、時代は七八六～八四八のチベット支配時代が中心である。其後のものもあるが、⁽²⁾ それにしても敦煌の藏経洞の封鎖される十一世紀はじめまでのものである。⁽³⁾

これらの写本は敦煌仏教の研究にとつての資料であることは勿論であるが、いわゆるチベット学、或はチベット仏教学にとつても実に貴重な資料である。

右の資料を産出したチベット支配期は、チベットの歴史ではティソンデツェン王(七四二～七九六退位)から、ランダルマ王(八四一即位～八四三)までの期間に当り、チベットが仏教をインドや中国から招請し、寺院を建て、僧を養成し、仏典の翻訳とその書写・流布を行つて仏教興隆をはたした、いわゆるチベット仏教前伝時代である。⁽⁴⁾

従来、この時代のことは、『ブワトンの仏教史』などの「チェージュン」(chos 'byung)と称する伝世のチベット仏教史書によつて知るほかなかった。ところが、敦煌出土の古写本は、それが断片的なもので叙述性に欠けるという点、チベット中央より離れた敦煌の地にのこったものであるという点、及び全体のどれだけの部分がどのような意図で残ったのか不明であるという問題はあるにしても、同時代の直接資料であつて、考古学的資料として貴重視される碑文や鐘銘にも匹敵する資料的価値をもつ。しかもきわめて豊富な数量を有する。これらの資料を研究に有効に適用するならば、伝世史書によつてしか垣間見ることのできなかつた八、九世紀のチベット仏教の実況をリアルに把握することにならう。

二、敦煌資料のチベット仏教研究における意義

敦煌出土のチベット資料に対する研究は、はじめは目録作成にあたったM・ラルー女史やF・W・トマス氏らによって手がけられ、写本の中の貴重な資料が録文・翻訳の形で紹介された。しかし、チベット学からの関心を誘発することもなく、しばらくは後続のないままであった。殊に、日本では漢文資料に関心を奪われ、チベット資料の方は最近まで全く無視されていた。それが本格的に注目されるようになったのは、一九五二年、P・ドゥミエヴィル教授がチベット宗論の漢文記録『頓悟大乘正理決』を敦煌資料の中に発見し、*Le concile de Lhasa* の名で発表されてからである。佐藤長博士は『古代チベット史研究』(一九五八)で、右のド氏の成果とJ・バコー氏が *Documents de T'ouen-houang relatifs à l'histoire du Tibet, 1940-1946* で発表した敦煌出土のチベット年代記を資料に加えて研究を行った。また、藤枝晃博士は、「吐蕃支配期の敦煌」(一九六二)を発表し

たが、この中で氏は漢文資料のみならずF・W・トマス氏の成果などをとり入れ、チベット文資料も加えて、チベット支配下敦煌の実態を明らかにしようとした。東洋文庫で行われているスタイン蒐集チベット文献の同定作業も含めて、その後の内外における敦煌出土のチベット資料への関心の高まりと成果は著しい。⁽⁶⁾

敦煌のチベット文写本の中には、社会経済文書や法律文書、年代記などもあるが、その大部分を占めるものは仏教の經典・論書・註釈書などの写本である。現在に伝承される木版のチベット大蔵經の仏典は、永い間に度々の改訂や再編を経たものであるが、なにしろ敦煌出土のものは、八世紀より九世紀にかけて進行した初期チベット仏典翻訳事業その時代のものである。それらはまさしく現在に伝わるものの原資料である。その中には、大蔵經の中に同種の仏典があり、文章を比べてみても綴字法の新旧ぐらいであり差異のないものもあるが、同種のものであっても文章が著しく違っていて異本と認められるもの、現在に全く伝わっていない古逸のものなども含まれている。これらによって、古逸仏典の蒐集、チベッ

ト仏典の原初形や異本の確認、当時の仏典翻訳の成立事情やその後の伝承過程などを追跡調査することができ。次にいくつかの例をあげよう。

現在チベット大蔵經には『般若心経』のチベット訳は大本のもの(北京版チベット大蔵經一六〇番)のみで、玄奘訳に合う小本のチベット訳は収録されていない。ところが、敦煌から多数見つかった『般若心経』のチベット訳は殆どが小本の訳である。⁽⁷⁾ このことより、当時やはり小本の訳の流行のあった事実を知ることができた。

また、『金光明経』は、チベット大蔵經にはサンスクリットからの訳二本と、漢文からの訳の計三種(北京版チベット大蔵經一七四、一七五、一七六番)が入っているが、敦煌写本中に漢文からの訳の異本が更に一本(ペリオ蒐集チベット写本五〇一番)見つかり、かつては少くとも四種の訳があったことが分った。⁽⁸⁾

求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅宝経』に円暉なる人物が註釈(漢文)を書いたものがあり、敦煌から見つかった(スタイン蒐集本五六〇七番)。そして、これをチェードウプなる翻訳僧が訳したチベット訳のあることも見つかった。

た(スタイン蒐集チベット写本二一九番)⁽⁹⁾。この二つは従来漢文の大蔵經にもチベット大蔵經にも全く無かったものであり、貴重な回収ができた。

そのほか、敦煌の写本によってはじめて存在を知ることになったものに、チベット文の禪文献がある。『楞伽師資記』『頓悟真宗要決』など、漢文禪籍からチベット文に訳したもの、禪師の語句を引用しながらチベット文で独自に著述したものなど相当数にのぼる。禪は、伝世史料によれば、宗論に敗退して以来、チベットより排斥追放されたと言われているもので、それがチベットの支配圏である敦煌でチベット系の人に読まれていた事実は大いに研究者の関心を惹くところである。チベット文の禪文献の中に古逸の禪文献を回収できるという点、禪のチベット文写本の存在が当時のチベット仏教のどのような事情を物語るのかなどの点から重要な資料的意義をもつものとして、最近、殊に研究対象にされることの多い領域である。⁽¹⁰⁾

すでにチベット大蔵經に入っている文献の成立事情や誤りなども敦煌資料によりはつきりさせることができ

る。チベット大蔵經に収録されている『ウテン国の予言』と題する文獻(北京版チベット大蔵經五六九番)は、ウテン仏教史を知るための貴重な文獻であるが、敦煌からこの文獻の写本が何点か見つかった、もともとこの文獻は『釈迦牟尼の涅槃の後、勝法はどのように滅するかの予言』と『ウテン国の年代記』との二つの独立した著作が合併して、一つの本になった経過がはっきりした。⁽¹¹⁾

また『見解の差別』という文獻は、チベット大蔵經に入っているが(北京版チベット大蔵經五八四七番)、各版本ともどうしたわけか文に混乱があつて解読しにくい。ところが、敦煌資料の中にこの本の写本が見つかった(ペリオ蒐集チベット写本八一四番)、これには乱丁がないところから、正しい形に修正することができた。⁽¹²⁾

『金光明經』の一訳本(北京版チベット大蔵經一七六番)は、訳者を記していない。ところが、これと同じ訳本が敦煌資料の中にみつき、それには奥書があつてエセイデ・ジナミトラ・ダーラシーラが訳したことを明記しており、不明であつた訳者名を補うことができた。⁽¹³⁾

敦煌資料の中に、漢文とチベット文を並記した語彙対

照表のような写本があり、漢文とチベット文の仏典を比較して学んだり、翻訳を行ったりするときのために準備したものであることも明らかにした。⁽¹⁴⁾

以上例示したようなことは主として文獻研究の分野での意義を示すものであるが、初期チベット仏教の史的研究の面で果す役割も大きい。代表的な例は、敦煌出土資料によるチベット宗論の史実実証である。

先にも紹介したP・ドゥミエヴィル教授は、一九五二年、敦煌資料中に『頓悟大乘正理決』と題する漢文文獻(ペリオ蒐集本四六四番)を発見し、これがチベット史書に述べる中国禪僧マハーヤナ(摩訶衍)とインド僧カマラシーラとの宗義論争の漢文記録であることを明らかにした。この事件は伝説臭が強く、従来史実としての信憑性が疑われていたが、敦煌から同時代の記録が見つかることにより一転して史実であることが実証された。後、この記録のチベット訳も見つき、⁽¹⁵⁾ それらを加えて検討してみると、宗論の実際は伝世史料の記述とは大分違つていたことが分る。敦煌資料の適用によって史的経過を検証し、史書伝承の欠落部分を補い修正してゆくことが

可能となった。⁽¹⁶⁾

初期チベットにおける翻訳語の形成と確立の過程や年代を確認することは、初期チベット仏教史解明の重要なテーマの一つである。チベット大蔵經に収録されている『二巻本訳語釈』(北京版チベット大蔵經五八三番)にはその間の事情を叙べた前文があり、これが研究の根拠にされるが、この文獻には敦煌出土写本も存在している。この度、山口瑞鳳博士はその敦煌本(ペリオ蒐集チベット写本八四五番)も参照して、この重要な文獻の和訳を試み⁽¹⁷⁾ られた。この場合、チベット大蔵經所収の伝世本のみではこの資料にどれだけの信憑性があるのかを確かめることができないが、この文獻成立当時の同種の写本が敦煌資料中に見つかったことにより、この文獻への信頼度はきわめて高いものとなった。

三、敦煌資料であることの問題点

前章において、敦煌資料が初期チベット仏教の文獻研究の面においても、史的研究の面においても重要な資料の役割を果すものであることを、いくつかの例をあげて

指摘した。ところで、これらのとり扱いにおいて、その資料がチベット本土のものでなく、敦煌から出土したものであるということの特に問題としなかった。研究が、ことさらにそのことを詮索する必要のない性格や範囲にとどまっているからである。しかし、研究のひろがりや深まりとともに、伝世史書の叙述範囲と見られるチベット中央地域と、それと離れた、しかも元漢文仏教圏である敦煌との隔りということは、どうしても露呈してくる問題である。避けて通れない命題として聊か論議を加えておきたい。⁽¹⁸⁾

例えば次のような問題に会おう。先にも述べたように、敦煌写本の中にチベット文の禪写本類が見つかった。ところが、伝世資料によるかぎり、宗論に敗れた中国禪僧マハーヤナ和尚はチベットより追放され、禪もそこより払拭された模様である。その筈であるのに、当時、チベット国の中にある敦煌において、チベット人に禪が学習されていた形跡が認められるのをどう理解したらよいであろうか。

これに関して、チベット史書はラサを中心とするチベ

ット中央の事情を伝えるもので、チベット本土より離れている敦煌のことは必ずしも一致するものではないとみて、ここ敦煌までは禪の禁止が及ばなかったと推定する解釈が一つ成り立ちえよう。しかし一方で、禪がチベットで禁止されたとするのは、後世のチベット史家の改竄で、敦煌資料のあり方が物語るように禪はチベット本土でも行われ続けていたとする見方もある⁽¹⁹⁾。もちろん、それ以外の折衷的解釈もありえようが、そのいずれと見るかによって初期チベット仏教の史的解釈や資料論が大きく分かれることとなる。問題が重要であるだけに慎重でなければならぬが、「いろいろの可能性がある」と結んで解明を打ち切ったり、仮定や推定をくり返すのみでは、折角の資料がありながら、あまりにも残念なことである。

そこで具体的な事実の解明にまで研究を進めようとするれば、どうしても敦煌とチベット本土とが、どのように違うかということ問わざるをえないことになるのである。

敦煌は、たしかにチベットの支配下に入ってその国の

一部となった。従って宗教・文化・制度等の相当部分においてチベット本土のそれと共通のものをもち、両地域の交流も密接であったと見るべきであろう。チベット大蔵経所収の仏典と同じものが敦煌からも発現していることを証している。しかし、すべてにおいて両者が重なり合うものであるかといえ、そうは思われない。漢文資料の方よりの研究成果によれば、敦煌は中国漢文化圏にありながらも時代によっては中国本土の影響から独立し、かなり異質な展開をしている。チベット資料の側に立って見た場合も同様で、地理的距離のあることは内容的違いのあることにも通じると見るのが自然であろう。しかも、もともと敦煌は漢文系文化の伝統をもつ地であって、その影響はチベット化してからも残っていたに違いない。言語が同じであるからといって、それらを直ちにその母国と共通の資料と見做すことは危険である。たとえば、法成(「チエードゥプ」という学僧は、チベット支配下の敦煌において漢文で著作を行っているが、かれがチベット語にも通じ、チベット仏典の翻訳にたずさわってチベット仏教にも通曉していたところか

ら、その著作にはチベット仏教の影響が見られる⁽²⁰⁾。もし、そのような成立事情に無知で、漢文仏典である故に中国中原の仏教の資料として研究に適用したならば、まさに滑稽な誤りをおかすことになるであろう。同じような例は、チベット資料の場合でもありえよう。しかし、チベット資料に関しては、まだどれがチベット本土系の文献や写本であるのか、どれが敦煌独自の仏教を反映しているものであるのかさえも判別するまでに至っていないのが現状である。その判別が可能にならないかぎり、たとえばチベット文の禪写本の存在理由や成立場所をどう考えるかの問題にしても結局は推定の根拠が定まらず、水かけ論に終始することになるであろう。

その現状を超えて、敦煌資料の性格を明瞭に判別できるようにするために、どのように研究が進められるべきであろうか。

四、今後の研究課題

上述してきたように、敦煌出土のチベット資料は、チベット仏教研究にとって貴重な同時代資料であり、それ

によって史実の検証を行い、古逸仏典を回収するなどが可能である。しかし、研究が更に進み、単なる伝世史料との対比検証にとどまらず、それによって史実の具体的な解明を意図しはじめるとき、我々は、敦煌の資料であるという地域的特殊性も含めて、もつとこの資料の構造や成立環境を知る必要に迫られることになる。それに對して、いま研究の現状はどうであろうか。またどの点に当面の研究目標を定めるべきであろうか。

第一に指摘したいことは、チベット文写本の写本学的研究の必要性である。一つの写本を資料とするとき、その写本が、何時、誰によって、どこで、どのような目的で写されたかが分ることが望ましい。奥書などがあつて確かめ得れば幸いであるが、それは殊にチベット写本の場合は稀有である。結局文面からの判定は難かしい。ちなみに、敦煌の漢文写本に対しては、多数の写本の比較対照からある程度それが可能になっている。筆跡や紙質などの形状を手がかりとして、記年や奥書は無くてもその写本の大体の性格や、時代などを判定することができ、るまでに研究が進んでいる⁽²¹⁾。チベット文写本について

は、現在のところ、そうした判別の方法が全くといっていいほど確立できていない。チベット時代は七八六年以後という上限があるので、漢文写本の場合ほど時代の幅が広くないが、それでもその間に思想や翻訳・写経のあり方に変化があったと考えられる。もし、個々の写本成立の年代がある程度判別できるならば、チベット期における教学変遷の層位も見定めることが可能となるであろう。また、ある写本が敦煌で写されたものか、それともチベット本土で写されたものが搬入されたものであるかの区別も知りたいところである。そうした判定の標準をチベット写本の中にどう見出すことができるかは未知であるが、漢文写本が多数の比較対照によって成功したように、チベット写本をなるべく多く見通してゆくならば、有効な判別の特徴を発見してゆくと可能ではないであろうか。幸いに、殆どのチベット写本のマイクロフィルムが将来されており、多数のチベット写本の写真を一処に集めて比較することも可能となった。このような作業をくり返すうちに、何らかの鍵が見つかるものと期待される。それに関して、筆者は、最近、翻

訳者チエードウプのチベット文の筆跡を確認したが、これも判定の一つの手がかりになりえよう。⁽²²⁾チエードウプの年代が分っているので、写本の成立年代も自ら限定されることとなる。右は筆写人の筆跡より写本判定を試みる例であるが、この方法は更に敷衍できるかもしれない。そのほか、綴字法や翻訳語法の違いからの判定も模索すべきであろう。⁽²³⁾

第二に必要なことは、敦煌仏教全像の解明の課題の中で敦煌自体のチベット仏教の実態が明らかになるということである。漢文資料の場合でも当初そうであったが、とかく敦煌資料を中国仏教やチベット仏教解明の為に利用すべき資料の宝庫と見做し、役立つもののみを恣意的に利用するという形になりがちである。しかしそれに先立ち、まず必要なことは、敦煌自体の仏教というものを明らかにすることである。このこと自体が研究目的とされるべきことは勿論であるが、資料論の立場から言っても資料の性格や位置を判定し、中国仏教やチベット仏教への資料適用の精度を増す意味において必須の基礎的解明である。

チベット仏教の研究にかかわって明らかにされるべき敦煌仏教は、いわゆる七八六～八四八年のチベット支配期を中心とする時代である。この研究への着手は前出の藤枝晃博士の「吐蕃支配期の敦煌仏教」によって行われ、当時の敦煌の輪郭や方法がほぼ明らかにされた。また竺沙雅章博士はチベット支配期の敦煌の僧官制度を明らかにされた。⁽²⁴⁾筆者も亦、この時期に活躍した学僧曇曠と、漢・蕃の両語に通じて、チベットの翻訳事業に寄与した法成（「チエードウプ」）の業績を敦煌写本より明らかにした⁽²⁵⁾が、これらの研究により、敦煌の漢人僧が、チベットの仏典翻訳や写経事業に従事していたこと、漢文仏教とチベット仏教が相互に学習され、混成の教学も形成されたこと、僧団の支配体制はどうであったかということ、漢文化とチベット文化が言語生活をはじめいろいろの面に入りまじっていたことなどの実態が分ってきた。しかし、これらの研究はどうしても漢文資料を主体とするもので、チベット文資料の方は可能なかぎり用いようとはしたが、なお利用しきいていない。やはり、この時代の解明には、チベット資料の十分な研究をまたな

ければならない。それが進むならば、敦煌とチベット本土との同異を測定するための根拠となる事実も見つかるのではないかと思われる。

それに関して、最近の山口博士やG・ウライ博士による敦煌出土のチベット文書の解説にもとづく研究は貴重である。⁽²⁶⁾これらの研究で、仏教資料の検討のみでは果せない敦煌におけるチベットの行政制度や他地域との交流などの解明が加わり、一層敦煌におけるチベットの位置や特色が明瞭になるものと期待される。

また黄文煥氏が中国に所蔵する敦煌出土のチベット文『無量寿宗要経』の筆写人・校勘人の氏名を全録して発表⁽²⁷⁾したことは、敦煌の写経事業の実態を知る上にきわめて有益な資料を加えることになった。なお、壁画や絹絵などの研究の寄与するところも忘れられてはならない。⁽²⁸⁾二十世紀のはじめに偶然にも発見された敦煌資料は、主として伝世資料に頼っていた従来の学問体系を問い直すこととなった。今後、初期チベット仏教研究においても、敦煌資料の採用は益々増えてゆくことであろう。小稿はそうした現状の中で、この資料群がどのような意義

をもち、どのような用意をもって研究に生かされるべきかを吟味してみたものである。

註

- (1) チベット(吐蕃)支配期の敦煌については、藤枝晃「吐蕃支配期の敦煌」、『東方学報』京都三一、一九六一、山口瑞鳳「吐蕃支配時代」(『講座・敦煌』2「敦煌の歴史」IV、一九八〇)参照。なお、敦煌のチベットへの陥落の年代について、七八一年の藤枝説、七八七年のドウミエヴィル説等がある、筆者はこれまで藤枝説に依ったが、この度、山口氏が右論文で提示された池田温氏説にもとづく七八六年をほぼ妥当とし、これを探ることとした。但し、山口氏の建中二年を、貞元二年の誤記とすることには同じ難く、むしろ先(七八)に寿昌県が陥ち、敦煌県が後(七八六年)に降ったとする説に傾く。
- (2) S. 五〇二番に木版ずりの断簡があるので、全てが手抄本とは言えないことになる。しかし、S. 七六五番に現代の西洋紙の断片がある例のように、蒐集文献の中に他処から集めたものが混りこんでいる可能性のあることも承知しておかなければならない。
- (3) 敦煌のチベット支配は、一応八四八年で終わるが、J. Hackin: *Formulaire Sanscrit-Tibétain du Xe siècle*, 1924. によれば、一〇世紀と推定できる文献も存在して

いたこととなる。

- (4) 山口瑞鳳「吐蕃王国仏教史年代考」、『成田山仏教研究所紀要』四、一九七八。
- (5) M. Lalou: Document tibétain sur l'expansion du Dhyāna chinois, JA, 1939, Les manuscrits des grandes Prajñāpāramitā trouvés à Touen-houang, SJY, 1954, Manuscrits tibétains de la Satsānari-kāprajñāpāramitā cachés à Touen-houang, JA, 1965, etc. F. W. Thomas: *Tibetan Literary Texts and Documents concerning Chinese Turkestan*, part I, Literary Texts, 1935, part II, Documents, 1951, part III, Addenda and Corrigenda, 1955. F. W. Thomas: *Ancient Folk-Literature from North-eastern Tibet*, 1957, J. Bacot, F. W. Thomas, CH. Tournassat: *Documents de Touen-houang relatifs à l'histoire du Tibet*, 1940-1946, J. Hackin, op. cit.
- (6) 東洋文庫チベット研究委員会編『スタイン・蒐集チベット文献解題目録』第一分冊(一九七七)と第六分冊(一九八二)未完。
日本では、一九六八年、筆者が敦煌写本中の『楞伽師資記』のチベット訳を紹介して以来、小島宏九、沖本克己、木村隆徳、原田寛ら各氏により、P. tib. 一六をめぐるとするチベット文庫資料の蒐集と研究が急速に起った(注10も参照)。また山口瑞鳳氏により、敦煌チベット

ト資料を用いての初期チベットの年代や制度などの検証が進められていることを挙げよう。

- モーロニ、R. A. Stein, A. Macdonald, A. M. Blondeau, Wu chi yu, Y. Imaeda のフランスの学者たちの研究が著し。フランス以外の学者の研究も含めて刊行された M. Lalou 女史の追悼記念号 *Études Tibétaines*, 1971. は、それらの集大成の一つである。また A. Macdonald, Y. Imaeda により、ペリオ蒐集チベット文写本中の重要文献が撰出され、左の如くに写真出版されたが、今後のチベット研究へ貢献するもの、特に大いである。 *Choix de Documents tibétains conservés à la Bibliothèque Nationale*, Tome I^{er}, 1978, Tome II^e, 1979. など Y. Imaeda が敦煌写本中にある『生死輪廻の歴史』(skye shi lo regus)を蒐集し、研究を附して刊行した *Histoire de cycle de la naissance et de la mort*, 1981. は最近の成果として記しておきたい。
- (7) 拙稿「敦煌出土のチベット訳般若経」『印仏研』二二の二、一九六五。
- (8) 拙稿「大善国大徳三蔵法師沙門法成の研究」上、『東方学報』京都三八、(一九六七)、一七二～一七三頁。
- (9) 前出拙稿「法成の研究」上、一五七～一六八頁。同「敦煌出土の『楞伽経疏』攷」『木村武夫教授古稀記念・僧伝の研究』一九八一。

(10) 敦煌出土の禪写本とその諸研究については、次の論文に集約されている。木村隆徳「敦煌チベット語禪文献目録初稿」、『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』四、一九八〇。D. Ueyama: *Études des manuscrits tibétains de Dunhuang relatifs au bouddhisme de Dhyana, bilan et perspectives*, JA, CCLXIX, 1981.

- 『講座・敦煌』8「敦煌仏典と禪」四「中国禪とチベット仏教」の項、一九八〇。P. Demiéville: Appendice sur «DAMODUOLOU», *Peintures monochromes de Dunhuang*, 1978. P. Demiéville: L'introduction au Tibet du bouddhisme Siné d'après les manuscrits de Touen-houang, *Contributions aux études sur Touen-houang*, 1979.
- (11) 前掲拙稿「法成の研究」上、一三二～一三五頁。
- (12) 拙稿「エセインの仏教綱要書」I、II「仏教学研究」一九七九、一九八一。
- (13) 前掲拙稿「法成の研究」上、一七四頁。
- (14) P. tib. 一二六一、P. tib. 一二五七など。前者は、次の論文で研究された。Li Fang kuei: A Sino-Tibetan Glossary from Tun-huang, *T'oung pao*, vol. 49, 1962.
- (15) 今枝由郎氏により P. tib. 八二三番が、『頓悟大乘正理決』に記録する宗義問答の旧問部分のチベット訳であると見られた。IMAEIDA Yoshio: Documents tibétains de Touenhouang concernant le concile

du Tibet, JA, CCLXIII(1975). なお P tib 八二七番も同様の写本。

- (16) チベット宗論とていふは P. Demiéville: *Le concile de Lhasa*, 1952. 以後の研究に次のようなものがある。
G. Tucci: *The Debate of bSam yas according to Tibetan Sources, Minor Buddhist Texts*, part II, 1958.
P. Demiéville: *Récents travaux sur Touen-houang*, *T'oung pao*, vol. 56, 1970. 拙稿「曇暁と敦煌の仏教学」『東方学報』京都三五・一五五～一七〇頁、一九六四。その他、なお、最近刊の論攻に、山口瑞鳳「摩訶衍の禅」『講座・敦煌』8、三七九～四〇八頁（一九八〇）がある。

- (17) 山口瑞鳳「二卷本訳語研究」『成田山仏教研究所紀要』IV、一九七九。

- (18) 地域差のことも含めて、敦煌資料のもつ問題性について曾て論じたことがある。拙稿「敦煌出土チベット文写本の資料性について」『日本西蔵学会々報』二一、一六七五。

- (19) チベット仏教古派（ニンマ派）の伝承する文献と、敦煌のチベット写本の中にある禅系の文献の記述内容が近似していることは、敦煌文献の示すことが特殊なことではなく、チベット本土でも行われたことを物語る証左で、アティンシャ以後のチベット仏教後伝時代に入って、中国禅の仏教を批判してインド系仏教の正当性を強調する

ために、史書に禅が追放されたと改竄して記したのではないかとする推定である。筆者も亦、この見方に関心をもちものである。

- (20) 前掲拙稿「法成の研究」参照。

- (21) 敦煌写本の形態的判別方法は、藤枝晃博士により提唱され、確立された。同氏「敦煌写経の字すがた」『曇暁』九七（一九六〇）。同氏『文字の文化史』（一九七二）など。最近発表されたフランスの J.P. Drège: *Les cahiers de manuscrits de Touen-houang, Contributions aux études sur Touen-houang*, 1979, *Papiers de Dun-huang essai d'analyse morphologique des manuscrits chinois datés*, *T'oung pao*, vol. 97, 1981 は、その方法論を承け、更に進めようとするもので、マイクロメーターで計測した紙の厚さのデータまで判断材料に加えて研究したものである。

- (22) S. 686, S. 687 の二写本は、同じ筆跡のウメ体チベット写本で、奥書も「比丘チエドゥブが造った」とある。他の筆跡との関連から、書写もチエドゥブ自身のものと推定しうる。このことについては拙稿「古代チベットにおける善悪業報思想流布の一面―チエドゥブ著の敦煌写本 S. 686, 687 をめぐって―」『小野勝年博士頌寿記念・東方学論集』（一九八二）で触れた。

- (23) チベット語の綴字法の違いや筆写の書体の変遷が分

ば、時代判別の有力な根拠になろうが、まだはつきりさせえない。

ちなみに、筆者は『楞伽師資記』や『頓悟真宗要決』らの『翻訳名義集』訳語法に合わない漢文からの直訳体を、訳語法整備以前の古い訳語法と推定し、この違いに文献の成立時代判別の一つの手がかりを求めようとした。しかし、沖本克己氏より厳しい批判を受けた『講座・敦煌』8、四一六～四一八頁、注25。筆者の推論も仮定の上に推定を重ねたものであるが、沖本氏の推論（筆者には理解できないところが多いが）も筆者の提起したことを「全てあやまりである」と全面否定できるほどの実証的根拠に基づくわけではないらしい。現状では「そう考えられない可能性もある」という推論構成上の御指摘と受けとりたい。ただ、『頓悟真宗要決』と『金剛般若』とが P. tib 一一六に同じ筆跡で連写されていることは、両者の翻訳時期に差があることと何ら矛盾するものではない。古い時代にできた文献と、それ以後にできた文献とを、更に後にそれらが必要とした人が同一紙に連写することは当然ありうることで、写本取扱以上の基本的常識である。なお、沖本氏が論述中に、漢文の対応を主とする敦煌の特殊な事情の中で、訳語法の違いを考慮する必要のあること。また、たとい旧い訳法でも後世まで行われた可能性がありうるこの意見には賛成であり、示唆されるところである。また、『頓悟真宗要決』の訳が

『楞伽師資記』のそれと同種ではあるが、より整っていることは筆者も感じるところで、考慮に入れるべきことであろう。

- (24) 竺沙雅章「敦煌の僧官制度」『東方学報』京都三一冊、一九六一。

- (25) 前掲拙稿「曇暁と敦煌の仏教学」、及び「法成の研究」上・下。

- (26) 山口瑞鳳「ソンチェン・ガムボ王の十六条法の虚構性と吐蕃の刑法」『隋唐帝国と東アジア世界』、一九七九。同氏「沙州漢人による吐蕃二軍団の成立と mkhar tsan 軍団の位置」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』四、一九八一。同氏「漢人及び通類人による沙州吐蕃軍団編成の時期」同右誌五、一九八二。なお、山口博士によると、M. Lalou: *Revendication des fonctionnaires du Grand Tibet au VIII^e siècle*, JA, 1955. は、チベット支配期の敦煌とその近隣の支配体制をうかがう確実な史料紹介であると指摘される。

- G. Uray: *The Old Tibetan Sources of the History of Central Asia up to 751 AD, Prolegomena to the Sources on the History of Pre-Islamic Central Asia*, 1979, etc.

- (27) 黄文煥「河西吐蕃経巻目録跋」『世界宗教研究』第二集、一九八〇。同氏「河西吐蕃巻式写経目録并後記」同右誌 1、一九八二。

(28) 例えば、Heather Karmay: *Early Sino-Tibetan Art*, 1975. で、敦煌遺品中に中国風とチベット・インド風の混成した絵画のあることを論じているが当時の敦煌の仏教や美術を知る上での貴重な材料提供である。

(補註) 馬世長「关于敦煌藏经洞的几个问题」『文物』一二、三二~三三頁(一九七八)にも藏经洞発現のチベット文写本についての報告があり、ここではその写本の全重量の推定が試みられている。

(うえやまだいしゅん・竜谷大学教授)